

冬十月、難波宮に幸す時に、笠朝臣金村の作

る歌一首 并せて短歌

九二八番

おしてる 難波の国は 葦垣の 古りにし里に  
人皆の 思ひやすみて つれもなく ありし間に  
続麻なす 長柄の宮に 真木柱 太高敷きて 食  
す国を 治めたまへば 沖つ鳥 味経の原にも  
ののふの 八十伴の緒は 廬りして 都なしたり  
旅にはあれども

反歌二首

九二九番

荒野らに 里はあれども 大君の 敷きます時は  
都となりぬ

九三〇番

海人娘子 棚なし小舟 漕ぎ出らし 旅の宿りに  
梶の音聞こゆ